

平成27年度 青柏祭曳山行事に係る各山町の出し物及びでか山運行時間

日	時間	鍛冶町	時間	府中町	時間	魚町	備考	
1日 (金)	20:00 23:00	山王神社境内～鍛冶町三差路曳出し【試運行】 鍛冶町三差路着(巻電気横)	19:00 20:00	印鑪神社～大手町角曳出し【試運行】 印鑪神社前着				
2日 (土)						15:00 御祇公民館～一本杉公園入口【試運行】 17:00 魚町見附着	人形見	
3日 (日・祝)	21:00 21:30 23:00	鍛冶町三差路【宵山】 鍛冶町三差路曳出し(花火合図) 山王神社境内着				8:00 飾り付け(御祇公民館) 19:00 お籠もり(本宮神社)		
4日 (月・祝)	16:00	山王神社境内曳出し【送り山】	1:00 7:00	印鑪神社境内曳出し【朝山】(花火合図) 山王神社境内着	7:00 7:10 8:00	(花火合図) 祭礼 魚町見附曳出し【本山】		
	19:30	鍛冶町三差路着(瀬川薬局前)	15:30 19:30	山王神社境内曳出し【本山】 大手町角着【戻り山】(夜見せ)	12:30 14:00 17:00 18:00 19:00	山王神社境内着【3台集合】 山王神社境内曳出し【戻り山】 一本杉通りのと共栄信用金庫ATM交差点着 一本杉通りのと共栄信用金庫ATM交差点曳出し 魚町見附着		
5日 (火・祝)	7:30	鍛冶町三差路曳出し【裏山】	9:30	大手町角曳出し				
	10:00	御祇川仙対橋着(御祇川大通り運行)	9:45	御祇川仙対橋着(御祇川大通り運行)	9:30	魚町見附曳出し【裏山】 御祇川仙対橋着(御祇川大通り運行)		
	11:00	食祭市場前着(臨港道路)	10:00	食祭市場前着(臨港道路)	11:15	食祭市場前着【3台集合】(臨港道路)		
	12:10	食祭市場前曳出し	12:20	食祭市場前曳出し	12:00	食祭市場前曳出し		
	12:40	七尾駅前(パトリア・ミナ.クル)着	12:45	七尾駅前(パトリア・ミナ.クル)着【3台集合】	12:35	七尾駅前(パトリア・ミナ.クル)着		
	13:35	七尾駅前(パトリア・ミナ.クル)曳出し	13:00	七尾駅前(パトリア・ミナ.クル)曳出し	14:10	七尾駅前(パトリア・ミナ.クル)曳出し		
	14:25	御祇川仙対橋着	14:05	御祇川仙対橋着	14:30	御祇川仙対橋着【3台集合】		
	アトラクション			【七尾まだら・七尾豊年太鼓・民謡・歌謡ショー】			14:30～16:00	
	14:45	御祇川仙対橋曳出し						
	15:15	魚町見附着						
15:45	魚町見附曳出し							
16:15	御祇川仙対橋着	17:10	御祇川仙対橋曳出し	16:20	御祇川仙対橋曳出し			
		18:00	魚町見附着	18:00	松本町着			
		18:45	魚町見附曳出し					
		19:00	大手町角着					
20:30	鍛冶町三差路着(巻電気横)			20:00	松本町曳出し			
21:00	鍛冶町三差路曳出し	21:00	大手町角曳出し【戻り山】	22:00	御祇公民館曳入れ			
23:00	山王神社境内着【納め山】	23:00	印鑪神社前着					



ちじんゆう(ちじんゆう) かんじんちよう あたか せき
智仁勇 勤進帳安宅の関

「疑って申し訳なかった。さあ、通られよ」
 主君義経を救おうとする弁慶一世一代の大芝居に、関所を守る富樫は心打たれた。嘘と知りながら一行をそのまま通す。
 1183年、壇ノ浦の合戦で宿敵平家をついに滅ぼした源義経。しかし疑い深い兄頼朝は、義経に叛逆の罪をかぶせる。都を逃れた義経は、忠臣弁慶らと山伏姿で奥州(東北)をめざす。
 逃避行を続ける一行は、ここ石川は小松・安宅の関にさしかかる。山伏と見たら厳しく取り調べるよう関所の富樫は命じられていた。東大寺再建のため勤進(寄付集め)を行っていると言う弁慶に、ならば勤進帳を読んで聞かせろ、と富樫は迫る。弁慶はとっさの機転で白紙の巻物を開き、大音声で読み上げた。
 さらに役人が義経に目をつけると、弁慶は、お前のせいで疑われた、と涙をこらえて主君を杖で幾度も打ち据えてみせたのである。
 歌舞伎十八番の一つに数えられるこの「勤進帳」には、智恵と仁義と勇気が詰まっている。



てんか きわ どうはく かえです
天下を極めた等伯楓図

「あっぱれ等伯、そちこそ天下一の絵師じゃ」
 魂のこもった等伯らの絵は、秀吉、淀君を感涙させ、長谷川派の名は世に鳴り響いた。
 1591年、天下人豊臣秀吉は、わずか3歳で亡くなった嫡男鶴丸の菩提寺として祥雲寺を建立した。その室内を彩る金箔地の障壁画を、秀吉は長谷川等伯に依頼する。
 七尾出身の等伯は、30歳を過ぎてから京に上り、約20年間御用絵師集團の狩野派に勝負を挑んできた。本来狩野派が請け負うような大仕事を得て、等伯一門は勇み立った。等伯は、楓の大木に繊細な秋の草花を組み合わせた『楓図』を、息子の久蔵は、八重桜の花びらを貝殻の粉で盛り上げた『桜図』を見事に完成させた。いずれも狩野派とは一線を画す表現であった。
 石川県七尾美術館では、現在5月10日まで国宝『楓図』を含む「長谷川等伯展」が開催されている。



ななお こまるやまじょう ちくじょう ば
七尾小丸山城 築城の場

「兄弟力を合わせていこうではないか」
 完成間もない小丸山城で前田利家・まつ夫婦と感懐を新たにするのは、利家の二人の兄、利久と安勝である。
 1581年、利家は織田信長から能登の国を与えられた。利家は、山頂にあって不便な七尾城を廃し、ふもとの小丸山に城を築くことを決める。
 その一昔前、すでに前田家当主となっていた長男利久に、武功で勝る四男利家へ家督を譲るよう、主君信長は命じた。不満はあっただろうが、利久はだまって承諾した。小丸山城ができると、利家は剃髪した利久を七尾へ呼び寄せる。利久は利家に仕え、後には金沢城で利家の代理も努めた。
 一方利家のすぐ上の兄安勝は、利家とともに各地で戦ってきた。利家が安勝に寄せる信頼は厚かった。小丸山城築城の監督を、1583年に金沢城へ移る際には七尾城代を、と利家は重要な役を安勝に任せている。

